

常照

第860号

お盆によせて

今年もお盆の季節がやってまいります。北海道は、旧盆の八月にお盆を迎える地方が多いようです。ちなみに函館は七月に迎えるようです。お盆になると、お坊さんの忙しい時期にもなります。

皆さまにおかれましては、先立たれた方々を偲び、お墓参りや、納骨堂にお参りされる方も多いのではないのでしょうか。

また日本の夏の風物詩である盆踊りや、浴衣で夏祭りや花火など、ゆく夏の風情を楽しむ時期でもあるようです。

お盆の風習の由来は、お釈迦様のお弟子さんである、目連尊者（もくれんそんじや）の逸話が元になっております。

目連さんが、先だった母のことを想い、今どうしているか心配で、お釈迦様に尋ねました。するとお釈迦様が、神通力でお母様の居場所を目連さんに見せたところ、なんとお母様は餓鬼道（がきどう）に堕ち、大変苦しんでいる様子でした。見かねて餓鬼道から、救いだす方法をお釈迦にお尋ねしました。お釈迦さまは、仏道修行のお坊さんに、供養することを勧めます。供養したことにより、目連さんの母は、餓鬼道から救われました。そして小踊りして歓びました。この歓喜の踊りが、盆踊りの始まりになった、という諸説があるようです。

浄土真宗は「盂蘭盆会法要（うらぼんえほうよう）」他宗では、「施餓鬼法要（せがきほうよう）」などが修行されます。

浄土真宗のお盆

お盆といえは、八月十三日の迎え火で、先立たれた方々をお迎えして、十六日に送り火でお送りいたします。各地の灯籠流しや、京都五山の送り火、大文字焼きが有名です。

浄土真宗では、迎え火や送り火で、迎えたり送ったりの儀式的なことはいたしません。

お浄土からこの娑婆（しゃば）へ還ることを還相回向（げんそうえこう）といえます。

忙しさにまみれ、煩惱に振り回され、ほんとうに大切なことを、忘れがちな生活をしている私たちに、先立たれた方々が「気づけよ！目を覚ませ！」と、お念仏の大切さに気付かせ勧めるために、還ってきてくださると、私はいただいております。

忙しい現代社会の中で、このお盆の時

期は、日常の煩わしさから解放され、ゆっくりと故郷で過ごす方も多いことでしょう。

せめてお盆の期間は、先立たれたかたを偲ぶとともに、ご苦勞を重ねながら家庭を守り、いのちを紡いでくださったこと、心から感謝をさせていただきたいものです。

亡き祖母のこと

お盆の時期になると思い出すのが、私が生まれる前の、祖母の話です。

八月が命日の祖母は生前、私に昔の苦勞話を幾度となく話してくれました。若かった私はそのたびに「もう何回もその話聞いたから」と半ば拒否していました。

今は歳を重ねるごとに、祖母の苦勞をよく知る人の話や、祖母の語っていた話を思いだすと、ただただ頭が下がります。邪険な対応をしたことに、申し訳なく思ひ、それとともに感謝の気持ちでいっぱい

いになります。

私の父（前住職）が未成年の時に、祖母の夫（前々住職）が病気で往生しました。住職亡きあと、父が一人前の住職になるまではと、祖母が一人で、お檀家さんの月忌参りをして、家族と自坊を守り、支えておりました。

当時の交通手段は車などありません。ひたすら歩いての月忌参りです。

特に冬の時期は大変だったようです。現在の新川河口の小樽側に「おたねはま」（現在は石狩樽川に移転）という、お檀家さんの集落がありました。そこに毎月欠かさず月忌参りをしていました。

厳冬期もお参りを休むことなく出かけます。朝四時に銭函の自坊を出ます。冬の四時は日の出が遅く、まだ真っ暗です。着膨れの防寒のまかないも大変です。

当時の道路は、除雪もとのつておらず、「おたねはま」まで歩ける道は唯一、海岸線の雪が解けている波打ち際の砂地です。

想像してみてください。石狩湾の海からの冷たく痛い風が顔を刺し、日によっては吹雪で先が見えなくなり、また海が大しけの日もあったことでしょう。ともすれば、波にさらわれそうになりながら、寒さと恐怖と不安の中で、真っ暗な海岸線を懐中電灯ひとつで、一步一步、足元を確かめながら歩き、数軒の月忌参りをして、昼食と夕食を頂いて、帰りはお檀家さんの馬橋（ばそり）で、自坊まで送ってもらったそうです。

当時の記録に「朝四時に出て、帰りは夜中の十時になることもしばしばだった」と書かれていました。

私も苦勞の一端を体験してみようとおもい、真冬の海岸線を歩いてみました。

銭函の自坊から、現在の海水浴場のドリームビーチを越えて新川河口までです。昔と違うのは、防寒の衣服が優れていること、スノーシュー（かんじき）で歩いたことで、暖かく快適に行くことが出来ました。

目的地まで、小さな河川を二か所渡らなければなりません。昔の橋は木造で海岸線側に作られていました。現在の橋は海岸から少し内陸側に作られていて、内陸側に戻り橋を渡るため、少々時間がかかりますが、目的地まで三時間を要しました。午前に出発して夕方暗くなり自坊に着きました。寒さと疲労でクタクタになったことを覚えています。

「ばあちゃん」に感謝、ありがとう！

お盆は家族みんなで、先立たれた人たちを偲び、その時代のご苦勞を語らいながら想いをよせ、感謝とともにお念仏申しながら過ごしたいものです。

合掌



発行所

☎047-0017

小樽市若松二丁目四番十七号
本願寺小樽別院

電話 (〇二三四) 二二一〇七四四番
FAX (〇二三四) 二二九一四〇八〇番
テレホン法話 二七一六六番

亡き人を

案ずる私が

亡き人から

案ぜられてゐる

南無阿弥陀佛